芸術文化振興基金　助成事業事例集

芸術文化振興基金

独立行政法人 日本芸術文化振興会

Japan Arts Fund

芸術文化
振興基金

Ver.H21.10

助成事業事例集

(舞台芸術編)

活動資金のお手伝いをします！

皆さまのご相談をお待ちしております。

独立行政法人 日本芸術文化振興会 基金部

芸術活動助成課 03-3265-6178
geijutsu-nt@ntj.jac.go.jp

地域文化助成課 03-3265-6407
chiiki-nt@ntj.jac.go.jp

■　音　楽　■

1. 日本テレマン協会創立 45 周年記念／日本テレマン協会第 181 回～186 回定期演奏会
日本テレマン協会（大阪府大阪市）

2. ひろしまオペラルネッサンス
ひろしまオペラ・音楽推進委員会（広島県広島市）

■　舞　踊　■

3. 越智インターナショナルバレエ「新・白鳥の湖」全幕
越智インターナショナルバレエ（愛知県名古屋市）

■　演　劇　■

4. 児童演劇地方巡回公演（僻地・離島公演）
社団法人日本児童演劇協会（東京都千代田区）

5. 「弥次さん喜多さん道中記　七度狐の巻」（古典落語より）
有限会社ひとみ座（神奈川県川崎市）

■　伝統芸能　■

6. ライブ能
財団法人山本能楽堂（大阪府大阪市）

7. 北海道邦楽邦舞大会
社団法人北海道邦楽邦舞協会（北海道札幌市）

■　多分野共同等芸術創造活動　■

8. ＜ダンス白州 2009－四つの節会（せちえ）＞
舞踊、芝居、音楽、映像、造形の新作部門
ダンス白州実行委員会（山梨県甲斐市）

＊　この事例集は、当基金の助成事業２０周年を機に多くの助成事業の中から、各地域・分野を代表するものとは限りませんが、標準的又は特徴的な事例を選定して執筆をお願いし、できるだけ各事例の個性を尊重しつつ体裁や文章上の統一を図るよう編集してご紹介しています。

1
舞台芸術編

日本テレマン協会創立 45 周年記念／
日本テレマン協会第 181 回～186 回定期演奏会

日本テレマン協会（大阪府大阪市）

■活動概要

バロックからベートーヴェンの音楽を斬新な斬り口で紹介し続けてきた。平成 20 年度は協会創立 45 周年にあたり、「延原の古典派へのアプローチ」「中野振一郎のバロック」という二つの軸をもって団体の方向性を提示することにした。そのコンセプトのもと定期公演を構成し、公演は全部で 6 回（東京 4 回・大阪 2 回）行った。

大阪の 2 公演は延原によるベートーヴェンの「第九」「合唱幻想曲」「荘厳ミサ曲」で、いずれもベートーヴェンの指示したテンポに基づく延原独自の解釈と古典派当時の楽器およびレプリカ（=以後は「クラシカル楽器」と表記）の使用という要素がポイントになっている。東京の 4 公演は長年当協会のミュージック・ディレクターとして中野振一郎の音楽性がテーマである。バロック時代の楽器およびレプリカ（＝以後は「バロック楽器」と表記）による演奏団体「コレギウム・ムジクム・テレマン」とともに中野が培ってきたバロック音楽の魅力をチェンバロ協奏曲という切り口で多角的に紹介・再確認し、更なる発見と向上をめざすという企画であった。

183 回定期演奏会（大阪・いずみホール）より

■応募に当たって

①大阪公演について

すべての演奏家の創造力を認め、ともに音楽を作ろうと考える延原の姿勢は日本の指揮者としてはとても珍しいものであるが、今後の日本の文化の発展を考えると、このような姿勢の指揮者の存在を広く知らせるべきだと考えたのがこの企画の最大の留意点であった。ベートーヴェンを選んだ理由は 1982 年に延原が試みた「100 人の第九」が、ベートーヴェンのメトロノーム指示に基づいた世界初の演奏であり、その試みがガーディナーやホグウッドといった指揮者にヒントをあたえ、世界的な潮流を生み出していったことにある。

②東京公演について

中野振一郎は延原が見出したチェンバロの第一人者であり、世界的な演奏家としても有名であるが、協会としては類まれなこの人材の次のステップを考えるべく、これまでの集大成を企画した。日本テレマン協会で育んだものを、それ以外の多くの演奏家にも共有できるものとしていきたいと考えていた。

■助成を受けて

主な成果としては二つあげられる。一つは延原武春に対して「ドイツ連邦共和国功労勲章功労十字小綬章」が贈られたことである。きっかけはこの公演を大阪・神戸ドイツ総領事館の副総領事が直接聞き、「このような演奏はドイツ本国でもない」と高く評価し、本国に紹介したことによる。

もう一つはこの演奏をきっかけに延原と関西を代表するオーケストラ「大阪フィルハーモニー交響楽団」との共演を民間団体が企画できたことである。企画の担当者も直接公演を聴き、「この人をもっと多くの演奏家に知らせたい」という感想をもったという。また協会としては延原指揮によるクラシカル楽器の魅力を更に伝えるべく、多くの演奏会を企画し、好評を博している。 大阪発信の音楽的な一つのムーブメントをつくりつつある。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 19 年度	6,000 千円	19,267 千円
平成 20 年度	4,500 千円	20,327 千円
平成 21 年度（予定）	3,000 千円	19,247 千円

連絡先
大阪府大阪市北区曽根崎新地 2-1-17
日本テレマン協会
Tel：06-6345-1046
E-mail：tij@cafe-telemann.com
HP：http://www.telemann.ws/

2
舞台芸術編

ひろしまオペラルネッサンス

ひろしまオペラ・音楽推進委員会（広島県広島市）

■活動概要

広島市の文化の拠点施設「アステールプラザ」において、高度な総合舞台芸術であるオペラを通じて、地域の芸術家や団体の育成・活発化やオペラの普及・振興を図り、「オペラのまち広島」を都市の顔として定着させ、高水準の文化として情報発信することを目的として、平成4年度にひろしまオペラ推進委員会（現：ひろしまオペラ・音楽推進委員会）が官民の構成で設立された。

自主制作によるオペラ公演を活動の主体に、研修（演技・歌唱・伴奏）、地元のオペラ団体との共催によるオペラ・マラソンを実施し、公演は平成6年度の初公演以来、平成20年度までに創作2演目を含み15演目37公演を実施しており、音楽性の高さと公演実績を認められ、平成18年度には「新国立劇場」地域招聘公演として招聘され、近年では海外から指揮者や歌手を招聘するなど国際文化交流も積極的に取組み、広島オペラ界の牽引役を担っている。

オペラ「カルメン」より

オペラ「ドン・ジョヴァンニ」より

■応募に当たって

この事業は、国・地方自治体・民間の助成団体に協力を依頼するが、舞台費が多くかかること、また質の高い公演を実施するためにオペラ経験の豊富な指導者の交通費など必要経費を必要とする。これらは高い芸術性及び観客へのアピールに必要な費用であることから、芸術文化振興基金に助成をお願いしている。

■助成を受けて

助成金を受けたことで、国内外で活躍するスタッフを招聘し、指導・公演をすることにより歌手・ピアニストのレベルアップにつながったとともに、観客に質の高い公演を提供し、全国に「オペラのまち広島」をアピールができた。
イタリアからオペラ経験の豊富な指揮者を招聘したことで、オペラへの取り組み姿勢などを学ぶことができ、今後のオペラ制作において、歌手やスタッフに多大な影響を与えた。また、韓国のオペラ団から一流の歌手を派遣してもらい、国際交流を図ることができた。
さらに観客に質の高い公演を提供できたことで、オペラへの関心の喚起を図るなど多大な恩恵を受けた。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成19年度	8,000千円	32,861千円
平成20年度	5,000千円	28,113千円
平成21年度（予定）	5,500千円	32,047千円

連絡先
広島市中区加古町4-17
ひろしまオペラ・音楽推進委員会
Tel：082−244−8000
E-mail：naka-cs@cf.city.hiroshima.jp
HP：http://www.cf.city.hiroshima.jp/naka-cs/opera/

3
舞台芸術編

越智インターナショナルバレエ 「新･白鳥の湖」全幕

越智インターナショナルバレエ（愛知県名古屋市）

■活動概要

越智實が 1949 年に「中部日本地方に本格的なクラシックバレエの伝統を確立し、以って芸術文化の振興に貢献する」というプリンシプルのもとに愛知県名古屋市に「越智 実バレエアカデミィ」を創立し、1980 年にアンナ・パブロワ没後 50 年に因み、パリ国際舞踊大学より「パブロワ記念」の称号、タイトルを授与され、「パブロワ・ニジンスキー記念　越智インターナショナルバレエ」と改称した。

創立 60 年の現在、愛知・岐阜・三重の三県下に 20 支部を持ち、アカデミックなバレエ教育を行なうとともに、本格的なクラシックバレエ公演を毎年実施している。

助成対象公演では、日本でもトップクラスのオペラハウスである「愛知県芸術劇場大ホール」において、指揮者を招聘し、地元のオーケストラを招いて壮大なグランドバレエを上演している。

「新・白鳥の湖」より

■応募に当たって

本格的なクラシック全幕バレエ公演は「会場（舞台）、舞台装置、照明、音楽、舞台衣装、ダンサーの質」が総合的に高くないと良い公演にならず、そのためには多額の事業費がかかるため、単独のバレエ団では実施が難しく、「助成金なくして公演は成立しない」といっても過言ではない。

助成対象である「新･白鳥の湖」全幕は世界で最も愛されている「白鳥の湖」を越智實が新しくプロデュースをした。助成金を受けるにあたり、クオリティの高いグランドバレエを上演する上で、「本当に（最低限）必要なもの」に絞り込んで、申請を行い、世界的なレベルの公演を観客に鑑賞していただけるように留意した。

■助成を受けて

平成 20 年度「新・白鳥の湖」全幕については、観客動員も良く、バレエ雑誌に掲載されたバレエ評論家から、またファンからも絶賛を受けた。年々、観客動員数が上がっているのも、一般の方にまで「クラシック全幕バレエの醍醐味」が伝わってきているからではないだろうか。

既に平成 21 年度も「ジゼル」全幕公演が決定しているが、越智インターナショナルバレエは、今後も基金からの助成を受けて、“日本におけるバレエ芸術の振興に貢献する”ために邁進したいと考えている。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 20 年度	6,500 千円	29,760 千円
平成 21 年度（予定）	2,500 千円	36,404 千円

連絡先
愛知県名古屋市中村区佐古前町 16-41
越智インターナショナルバレエ
Tel：０５２－４８１－４４８８
E-mail：info@ochiballet.com
HP：http://www.ochiballet.com

4
舞台芸術編

児童演劇地方巡回公演（僻地・離島公演）

社団法人　日本児童演劇協会（東京都千代田区）

■活動概要

日本児童演劇協会は、児童青少年の演劇に関わる諸活動（鑑賞活動・表現活動）を通じて、児童青少年の健全な育成を願う、教師・劇団関係者・研究者等で、昭和 23 年に創立された。劇団による各種の公演事業、幼・保の教師を対象に「幼児の劇あそび夏季講習会」、小・中学校教師対象のワークショップの開催、出版活動等を行っている。

この事業は、昭和 35 年度より「優れた児童青少年演劇を日本中の児童青少年に提供したい。とりわけ、日頃生の舞台芸術に接することの少ない離島・過疎地の児童青少年に優れた児童青少年演劇を提供したい。鑑賞させることによって、児童青少年の豊かな人間性の涵養に寄与したい」という趣旨のもと、文部省（当時）の助成を得て開始、今年度で 50 年目を迎えた。学校の体育館での公演、生まれて初めて生の演劇に接する児童青少年に感動を与えてきた。「遠い所、僻地の本校へ来ていただき、熱のこもった劇で、心から感謝している」といった学校長からの賛辞が多数寄せられている。

劇団あとむ「あとむの時間はアンデルセン」より

■応募に当たって

児童青少年演劇は毎年多数の作品が創出されており、本事業では、その中から優れた演劇を選定したいと心を砕いている。より優れた作品を児童青少年に提供するために、毎年度作品の選定に最も苦慮し、「選考委員会」を設け慎重に選んだ作品を上演している。

また、今、子どもたちが文化を享受する機会も、東京を始めとする大都市に集中し、文化格差も拡がってきている。本事業では、公演地の選定にも配慮し、生の舞台芸術に接することの少ない地域（県）、とりわけ小規模校での公演実施を企図している。

全国の少しでも多くの児童青少年に、よりよい芸術鑑賞の機会を与えるべく努力を重ねている。

■助成を受けて

助成金を得ることで、質の高い優れた作品を確保・提供できたこと、そして県や市町村からの対等の助成金を確保できたことにより、通常は芸術文化に接する機会がほとんどない僻地・離島での公演実施が成就できた。

今、学校では“学力向上”の名のもと、演劇を始め生の舞台芸術を鑑賞する機会が減ってきている。このことは、劇団等の努力だけでは難しく、当協会が中心となって、県市町村教育委員会等の協力も得ながら、この事業を軸に、その回復に向けて尽力していきたいと考えている。

また、子どもたちは、学校を含めた“地域”の中で育っていく。少子化で子どもたちが少なくなっている現在、地域の人たちを巻き込んでの公演、とりわけ子どもたちだけではなく、父母・祖父母等を交えての 3 世代での観劇等、いろんな工夫を重ねてさらに拡大していきたいと考えている。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 19 年度	23,000 千円	95,218 千円
平成 20 年度	22,000 千円	92,394 千円
平成 21 年度（予定）	21,500 千円	88,461 千円

連絡先
東京都千代田区六番町 13-4 浅松ビル 2A
社団法人　日本児童演劇協会
Tel：０３－５２１２－４７７１
E-mail：jidogeki@air.linkclub.or.jp

5
舞台芸術編

「弥次さん喜多さん道中記　七度狐の巻」（古典落語より）

有限会社　ひとみ座（神奈川県川崎市）

■活動概要

人形劇団ひとみ座は、日本の伝統人形劇が歌舞伎をもしのぐ隆盛期があったことを目標に、新たな人形劇を創造するという大きな志をもって、1948 年鎌倉市で創立された。その後、川崎市に本拠を移し、全国各地での一般公演、学校公演、『ひょっこりひょうたん島』など NHK テレビ番組の出演、映画、コマーシャルにと、幅広く活動の場を作ってきた。

戦後の人形劇が、「せりふで説明する子ども向け作品」に偏りがちだった中で、ひとみ座は子ども向けに質の高い作品を作り続けることはもとより、都心の劇場を借りて毎年、約 70 人の劇団を挙げてシェイクスピア、安部公房、泉鏡花などの作品を、「大人が楽しめる現代演劇」として公演を続けてきた。

芸術文化振興基金の支援で行われた『リア王』『夏の夜の夢』、あるいは安部公房に委嘱した『少女と魚』、泉鏡花『天守物語』などの公演は、新国立劇場小劇場、俳優座劇場などで行われ、観客の感動と賞賛が大きく、専門家の評価も高かった。昨年度の創立 60 周年記念公演には、『マクベス』を新たな製作で公演し、成功を収めた。

「弥次さん喜多さん道中記　七度狐の巻」より

■応募に当たって

「伝統に学びながら、新たな人形劇を創造する大志」を原点とするひとみ座は、豊かな感動を求め、子ども達に安心して見せられる良質の芝居を求めている人々に応えることを、常に製作の基本としてきた。

特に、『弥次さん喜多さん道中記　七度狐の巻』（古典落語より）を企画するに当たっては、伝統をどう把握し、子ども達にどう伝えて行くかを追求しながら、健康な笑いと、失敗してもくじけないたくましさなどを盛り込んだ舞台にすることを目指してきた。

■助成を受けて

人形劇の製作でもっとも大きな経費が、1 体数十万円かかる人形の製作費であり、台本製作費、舞台製作費、会場費、スタッフ人件費、出演料などがそれに次ぐものである。しかし、質の高い、楽しみや夢のある舞台を作るためには、それらの費用を惜しむわけにはいかない。しかしまた、観客が負担できる入場料の限度もある。

こうして、芸術文化振興基金による劇団の製作への助成は、舞台の質を高めるとともに、観客の負担をできるだけ抑えるという二重の意義をもっている。基金が創設される以前には、製作資金のめどがつかないために、何度も企画を断念せざるを得ないことがあった。

基金の存在は、創造的な活動の支えとなり、継続の保障となっている。それは、同時に、社会が求める心の豊かさへの保障でもあることを、公演の成功を通して、観客とも共有していきたいと願っている。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 20 年度	2,400 千円	7,109 千円
平成 21 年度（予定）	2,200 千円	8,213 千円

連絡先
神奈川県川崎市中原区井田 3-10-31
有限会社　ひとみ座
Tel：０４４－７７７－２２２２
E-mail：puppet@hitomiza.jp
HP：http://hitomiza.jp/

6
舞台芸術編

ライブ能

財団法人山本能楽堂（大阪市中央区）

■活動概要

昭和 2 年創立の山本能楽堂は、大阪オフィス街の谷町 4 丁目に佇む能楽堂（平成 18 年国登録有形文化財）を拠点に、平成 18 年財団法人認可を経て、能の普及と発展に尽力している。敷居が高いと思われがちであった能楽堂に気軽に足を運べるように、新しい視点にたった企画を打ち出している。

ユネスコ無形文化遺産「能楽」は、日本が世界に誇る芸術であるものの、残念なことに能楽ファンが減少する傾向性の指摘もあり、劇場で切符を買って能を見ようとする人々ではなく、偶然居合わせた不特定多数の人々を対象に能の素晴らしさを感じてもらえるよう、壁で囲まれた劇場ではない駅構内や公園、公共施設のエントランスホールなどのオープンな公共スペースで、まるで、バンドがストリートライブを行うように能を公演する「ライブ能」を企画した。現代における能は、「特定の観客のための特定の芸術」にならないように、劇場で観客を待つのではなく、能楽堂を飛び出して「現代に生きる魅力的な芸能である」ことをアピールしていくため、現代人の心に向けて、能楽器の持つ魂に響くビート、能装束の豊かな色彩、謡声の生の響きと詞章の美しさをライブならではのあふれる臨場感で届け、能楽ファンの裾野を広げることをねらいとしている。

中大江公園桜下能

東横堀川「川舞台」

■応募に当たって

能楽堂での公演や薪能との大きな相違点として、大がかりに作りこむ舞台ではなく 8 会場それぞれの制約に合わせ、畳や不織布カーペットなどでフレキシブルに仮設舞台を整える会場マネジメント体制を考慮した。演目では視覚的に美しくインパクトのあるクライマックスを 15～20 分程度での上演とした。

また、観客の年齢層に広がりを持たせるために、チラシデザインを現代的なものとし、開催する会場や時間帯も多様に設定した。さらに、能にはじめて接する人々にも理解しやすいように開演前のミニレクチャーも行うことにより、演者の一方的な発表ではなく、観客が積極性を持って観賞できる企画となることを意識した。

■助成を受けて

基金助成により、公演を実施する法人とともに会場側にとっても励みになり、会場側からより積極的に会場設置の工夫や観客となりうる層への周知協力が得られるなど、法人と会場側との協働的な要素を持つことができた。このノウハウを生かして、アートワークショップを取り入れた新作能の公園等での上演もできた。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 21 年度（予定）	1,800 千円	6,010 千円

連絡先
大阪府大阪市中央区徳井町 1-3-6
財団法人　山本能楽堂
Tel：０６－６９４３－９４５４
E-mail：info@noh-theatre.com
HP：http://www.noh-theater.com

7
舞台芸術編

北海道邦楽邦舞大会

社団法人北海道邦楽邦舞協会（札幌市中央区）

■活動概要

昭和 33 年 4 月に第 1 回の北海道邦楽邦舞大会が開催されて以来、日本の風土をうたい、日本人のこころを伝える優雅な伝統芸術である邦楽邦舞として、その芸道に打ち込む人達が年に 1 度、厳しい精進を披露する「晴れ舞台」としての北海道邦楽邦舞大会が今日まで休むことなく毎年開催されている。

同法人は、北海道の邦楽邦舞の専門家の会員で構成されるプロ集団組織として活動しており、各流、各派の粋を超えて統括する法人としての役割を踏まえ、北海道の邦楽家たちの到達点を示す発表催事の場を持つとともに、伝統芸能の積極的な啓蒙普及活動を行っている。

なお、大会の出演者は、会派代表者、幹部、名取以上のプロフェッショナル約 30 名が出演する舞台として開催しており、特に、邦楽演奏家と舞踊家が、このように永く継続して都道府県単位の大会を開催しているのは全国的にみても北海道だけであると邦楽関係者からは高く評価されている。

創作舞踊「北の栄」より

清元「神田祭」

■応募に当たって

平成 21 年度の「第 51 回北海道邦楽邦舞大会」の開催は、日本古来の伝統芸能に観客が接する数少ない場であり、邦楽邦舞への関心と理解を深める貴重な機会となっている。これは、道民の情操涵養にも寄与するものであり、本大会と併せて、伝統芸能に対する若年層への啓蒙普及と鑑賞者の拡大、邦楽邦舞へのより深い理解と関心を高める公開講座等を開催するなど法人として継続して取り組んでいくべき重要な課題である。

このことから、毎年の北海道邦楽邦舞大会においては、伝統芸能をさらに発展させ得るよう、若い舞踊家も出演できるなどの工夫を重ねながら、今後とも伝統ある大会を継続させるよう努力する。

■助成を受けて

芸能従事者の高齢化による会員の減少、不況による企業援助の減少、地方自治体の助成金削除など、とりまく環境が厳しく協会の財政も苦しい状況にある中で、入場券収入と広告収入で大会の経費を賄うことはできないことから、不足分は法人の自己資金で賄うこととなるが、基金助成を受けることにより、大会を高水準に保つことができ経費負担も軽減できることから、北海道の伝統芸能の公開活動、人材育成等をも積極的に推進することができる。

今後においても、日本の伝統芸能の振興に益々貢献していきたい。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 19 年度	2,000 千円	15,663 千円
平成 20 年度	2,800 千円	20,189 千円
平成 21 年度（予定）	1,600 千円	14,175 千円

連絡先
札幌市中央区南４西 10-1004-5-901
有限会社　クリエーション飛弾内
社団法人北海道邦楽邦舞協会
Tel：０１１－５１２－９７０７
E-mail：minocreation@yahoo.co.jp

8
舞台芸術編

＜ダンス白州 2009－四つの節会（せちえ）－＞
舞踊、芝居、音楽、映像、造形の新作部門

ダンス白州実行委員会（山梨県甲斐市）

■活動概要

白州町・山梨県内外の地域研究者、文学者、舞踊家、演劇関係者、美術家、建築家、デザイナー、映像作家、ジャーナリスト、一般の人々が、都会・農村、新旧アートの交流と実践を通して、芸術・芸能・文化の活性化および、自然と結び付いた文化の創造と鑑賞を目指し、1988 年に最初のフェスティバル「白州・夏・フェスティバル」を開催した。その後白州町内外の一般市民の関心の高まりとともに、一過性でなく通年何度かのイベントの実現、さらにはレジデント型の創造活動の拠点作り、国外の組織との共同企画・制作を実施してきた。12 年の活動を経て一年休止したが、2001 年「ダンス白州」として再始動した。

21 年目の今年 2009 年は、「土の節」「火の節」「水の節」「空の節」と題する四つの節を要とした＜ダンス白州 2009 －四つの節会(せちえ)－＞を 1 年を通し開催した。

鬼太鼓座公演風景
土の節での公演 2009）

田中泯（土の節での公演 2009）

■応募に当たって

時代に流されることなく、また形に固執せず、フェスティバルの理想を求め、常に試行錯誤する場でありたいと願う意思により発足した。効率や利便性、経済性ばかりがますます価値とされる今、すでに完成されたものを持ち込み予定調和的に執り行うことが目的ではなく、発表する人、手伝う人、みる人、参加する人、働く人、それぞれが役柄を持ちながら関連を感じとり、＜まつり＞をかたちづくっていくような運営を試み続けている。

よって、各節のプログラムや運営など全てについても、その前の節の終了後に再点検し、前節の経験を生かしその都度よりよい方法を検討し常に進化すべく努めている。助成の申請にあたっては、制度上、翌年度のプログラム詳細を、実施の半年から 1 年以上前には決定していかなくてはならないが、申請した内容の遂行にあたり、よりよい方向へ向かうべくその都度常に自問自答し、検討・調整を行っている。

■助成を受けて

文化・芸能の原点である自然に学びながらの集団創造活動の過程を実践し検証することができた。また、作品としての実験性と完成度を重視し、質の高いプログラム・フェスティバルとなった。

伝統と最先端の前衛を繋ぎ（時代を超える）、内容はもちろん、組織・運営面での実験を果敢に行い、若い世代の自立に貢献した。事業を通じて地域・国・世界をまたぎ、異文化を繋ぎ、また、都市・農村文化を繋ぐことができた。資金面では自助努力を最大限行うものの、民間、県内からの支援もほとんど望めず、実現にあたっては基金の助成は大きな役割を果たしている。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 19 年度	4,500 千円	25,019 千円
平成 20 年度	4,000 千円	25,978 千円
平成 21 年度（予定）	1,700 千円	20,157 千円

連絡先
山梨県甲斐市上芹沢 64
ダンス白州実行委員会
Tel：０８０－３４１５－２９１９
E-mail：tokason@cronos.ocn.ne.jp
HP：http://www.artcamp.org

Japan Arts Fund

芸術文化
振興基金

Ver.H21.5

助成事業事例集

(文化財編)

活動資金のお手伝いをします！

皆さまのご相談をお待ちしております。

独立行政法人 日本芸術文化振興会 基金部

地域文化助成課　　03-3265-6407

ご相談は E-mail でもお受けします。
chiiki-nt@ntj.jac.go.jp

■　歴史的集落・町並み、文化的景観保存活用活動　■

１．茅葺き民家・旧福島邸の土蔵修復ワークショップによる里山の文化的景観保存活動（石川県輪島市）
特定非営利活動法人 輪島土蔵文化研究会

２．法隆寺領播磨国鵤荘啓発ガイドマップ作成活動（兵庫県揖保郡太子町）
太子町教育委員会

３．三国湊歴史を生かす街づくり文化フォーラム（福井県坂井市三国町）
特定非営利法人 三国湊魅力づくり PJ

４．智頭町板井原集落保存活用シンポジウム（鳥取県八頭郡智頭町）
智頭町

■　民俗文化財の保存活用活動　■

５．市指定無形民俗文化財デジタル映像記録事業（富山県射水市黒河）
射水市

６．見付天神裸祭の保存伝承活動（静岡県磐田市見付）
見付天神裸祭保存会

７．正八幡神社龍王舞伝承・公開（兵庫県姫路市船津町）
正八幡神社龍王舞保存会

８．拝宮農村舞台公演（徳島県那賀郡那賀町拝宮）
拝宮谷農村舞台保存会

■　伝統工芸技術、文化財保存技術の保存伝承等活動　■

９．伝統構法による建築の修理技術の研修（新潟県柏崎市西山町）
特定非営利活動法人 伝統木構造の会

１０．珠洲古窯復元焼成実験（石川県珠洲市）
珠洲古窯研究会

１１．土佐楮生産技術の継承及び後継者養成事業（高知県吾川郡いの町ほか）
土佐楮保存会

１２．原種養蚕から絣紬織物製作技術保存伝承活動（宮崎県東諸県郡綾町）
特定非営利活動法人 日本工芸継承協議会

＊　この事例集は、当基金の助成事業２０周年を機に多くの助成事業の中から、各地域・分野を代表するものとは限りませんが、標準的又は特徴的な事例を選定して執筆をお願いし、できるだけ各事例の個性を尊重しつつ体裁や文章上の統一を図るよう編集してご紹介しています。

1
文化財編

茅葺き民家・旧福島邸の土蔵修復ワークショップによる里山の文化的景観保存活動

特定非営利活動法人　輪島土蔵文化研究会（石川県輪島市）

■活動概要

能登半島地震で被災した茅葺き民家である旧福島邸の土蔵を、輪島市・地元住民・左官職人・学生ボランティアらの協力により、ワークショップにより修復する。単に震災復興ではなく、茅葺き民家と土蔵による里山集落の文化的景観の保存活動であり、同時に、過疎化が進む集落活性化、里山・景観を研究する東京農業大学及び金沢大学などの学生と地域の連携、左官技術の伝承に役立てる。

5～10 月にかけて 5 回のワークショップを計画。第一回は中途半端に残った土壁撤去。第二回は土と藁をまぜる土づくり。第三回は竹と縄で小舞をかく作業前半。第四回は小舞をかく作業後半。第五回は土の泥団子を小舞につける壁作り及びシンポジウムを行う。作った壁は土を乾燥させてから、平成 22 年度以降、大直し、中塗り、仕上げなどを行う予定である。

輪島市の入口に位置する茅葺き民家・旧福島邸

海外のボランティアも参加した土づくりワークショップ

■応募に当たって

背景として輪島市文化的景観推進事業（文化庁国庫補助事業）において、三井地区の茅葺き民家、土蔵、納屋が山裾に並ぶ里山の景観が候補地にあげられており、本旧福島邸が輪島市の入口に位置するため、三井の景観の象徴にもなっていることがあった。しかし、その文化的景観の重要な要素である土蔵が能登半島地震で被災し、外壁が崩落。修復のめどが立たずに放置され、このままでは解体撤去が危惧されていた。

そこで、輪島において震災以降に土蔵修復を行ってきた土蔵文化研究会と福島邸を管理している三井の地元有志による三井活性化共同組合とで相談していたところ、文化的景観に係わっている日本ナショナルトラストと東京農業大学教授から芸術文化振興基金助成の存在を知った。

■助成を受けて

この活動は、ひとつの土蔵の修復を通じて、単に文化的景観の保存だけでなく、震災復興、過疎地活性化、大学・学生と地域の交流、都市と里山の交流、左官技術の伝承など、極めて多くの意義があると考えている。この助成を生かして少しでも多くの効果が上がるように、ひとつひとつ作業を進めていきたい。

土蔵修復は 1 年以上かかるため、できれば来年度以降も助成を受けて修復を完成させたいと考えている。さらにそれ以降は、茅葺き技術の伝承など、三井地区の文化的景観を保存するための様々な課題があると思われ、それらにも少しずつ取り組んでいきたい。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 21 年度（予定）	1,200 千円	2,800 千円

連絡先
輪島市三井町長沢 1-49-3
NPO 法人輪島土蔵文化研究会　萩野紀一郎
Tel:0768-26-1666　Fax:0768-26-1665
E-mail：kibohagino@aol.com
HP：http://wajimareno.exblog.jp/

2
文化財編

法隆寺領播磨国 鵤（いかるがしょう） 荘啓発ガイドマップ作成活動

太子町教育委員会（兵庫県揖保郡太子町）

■活動概要

法隆寺領播磨国鵤荘は、中世奈良法隆寺の荘園として重要な位置を示していた。水田等は古代の条里制地割がほぼそのままの景観として残されている。広範囲に分布している荘園遺跡を保全するため、住民の充分な理解と協力のもとに鵤荘の水田・水路・集落等の地割を明確にし、中世景観をできるだけ復原するとともに、中世と現在との関連の普及と保存活用を推進する。

鵤荘膀示石

鵤荘の境界に接する位置に設置された鵤荘膀示石は、絵図で 11 箇所描かれている。地元では「聖徳太子の投げ石」と呼ばれ、触れたり動かしたりするとタタリがあると言い伝えられている。【兵庫県指定文化財】

斑鳩寺三重塔

斑鳩寺伽藍のうち最古の建造物。天文十五年に消失後、永禄八年（1565）に再建された。【国重要文化財】

■応募に当たって

鵤荘の文化的景観及び史跡保護に関する啓発活動として、鵤荘遺跡のガイドマップを作成し、広く町民及び来訪者に普及啓発を進め、鵤荘の魅力をアピールして知名度を上げることをねらいとしている。

■助成を受けて

この活動は、ひとつの土蔵の修復を通じて、単に文化的景観の保存だけでなく、震災復興、過疎地活性化、大学・学生と地域の交流、都市と里山の交流、左官技術の伝承など、極めて多くの意義があると考えている。この助成を生かして少しでも多くの効果が上がるように、ひとつひとつ作業を進めていきたい。

土蔵修復は 1 年以上かかるため、できれば来年度以降も助成を受けて修復を完成させたいと考えている。さらにそれ以降は、茅葺き技術の伝承など、三井地区の文化的景観を保存するための様々な課題があると思われ、それらにも少しずつ取り組んでいきたい。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 21 年度（予定）	200 千円	410 千円

連絡先
兵庫県揖保郡太子町鵤 1310-1
太子町教育委員会社会教育課文化財係
Tel：079-277-5100　Fax：079-276-6600
E-mail：　syakyo@town.taishi.hyogo.jp

3
文化財編

三国湊歴史を生かす街づくり文化フォーラム

特定非営利活動法人　三国湊魅力づくりPJ（福井県坂井市三国町）

■活動概要

三国湊魅力づくりPJは、地域住民や来街者に対して三国湊を中心とした三国地区の魅力ある賑わいの創出、周辺環境の保全に関する事業などを行い、地域経済の活性化に寄与すること、循環型地域社会への創出に取り組むことを目的とした活動を行っている。

北前船の寄港地として栄え、今なお民家やその町並みにかつての歴史文化を残存させており、歴史や文化を生かした街づくり、民家の保存修復、活用が行われている。過去から脈々とつながってきた地域や街並みの風景の履歴にも着目し、これらを組み合わせたこれからの「街のあり方」について認識し、地域活性化活動の新たな可能性を探究していく取り組みとして、平成18ー20年度にかけ、年に1回のペースで、三国の歴史文化の深層を再発見する文化フォーラムを開催した。あわせて歴史文化と歴史的建造物や風景の履歴についての調査研究に取り組み、今後の基礎資料としている。

写真左：平成18年度の文化フォーラム基調講演の様子（中沢新一氏）
写真右：平成18年度の文化フォーラムパネルディスカッションの様子

■応募に当たって

法人としては、三国湊で積み重ねられてきた豊かな風土（歴史文化や自然）の上に立ち、新しい文化を創出して次世代につなぎたい、また、住民に自分達の町のすばらしさを充分に知ってもらいたい。そのため、大切な地域資源である民家、街並み・風景、歴史文化をどう活かしていくかという課題に取り組む必要性を感じ、メンバーも勉強したいという思いがあった。基調講演講師には通常直接話を聞くことが難しい専門家を招へいし、パネルディスカッションには三国出身者及び三国住民も出演するなど構成を工夫した。

■助成を受けて

第1回目は大きく人類学宗教学的視点からみた三国湊の発見をテーマに、三国湊の歴史文化を成立させてきた背景の認識を深め、今後の街並み・民家保存活動を推し進めていく為の根拠と意義を見出した。第2回目は三国湊の潜在的な魅力を浮かび上がらせ、街並み保存の方向性を獲得できた。第3回目は街並みを保存し活用していく時の住民の心構え（自らを恃む精神で、来街者と共に楽しむ）と、歴史的建造物だけでなく街並みを構成している坂道・小径・石垣・緑・地名等を残していく大切さを提唱できた。これらを通して、街並み保存活動全体としてのハード・ソフト面・人づくりを継続的に実施していけば、地元住民や来街者にとっても心のふるさととなる可能性のある町であることも学べたことは大変有意義であった。

今後は、街並みのより具体的な保存活動を実践していくことと文化的感性や知識を成熟させていくためにも、新しい文化創出のボトムアップを図る取組に着目した文化フォーラムを開催していきたい。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成18年度	900千円	3,176千円
平成19年度	1,300千円	3,050千円
平成20年度	800千円	2,460千円

連絡先
福井県坂井市三国町北本町4-5-5
NPO法人　三国湊魅力づくりPJ
理事長　西澤弘之
E-mail: hirnishi@h4.dion.ne.jp
HP：http://www.mikuni-minato.jp

4
文化財編

智頭町板井原集落保存活用シンポジウム

智頭町（鳥取県八頭郡智頭町）

■活動概要

智頭町は、鳥取県の最東南部に位置し、1,000m 級の中国山脈の山々に囲まれ、町総面積の 93%以上が山林で「杉のまち」として古い歴史を有した町である。昨今では、鉄道や国道が整備され、さらに高速道路の開通が間近に控えた交通の要衝へと変わりつつある。

町の中心部から約 5ｋｍ林道を上がると、昭和 30 年代当時の建物群が立ち並び周囲を山々に囲まれた山村集落「板井原集落」がある。この集落は町とを結ぶ車道ができたことで、住民が町へ生活を構えるようになり、アルミサッシもないまるで時間が止まっているような集落景観を残している。しかし、このまま放置しておけば朽ち果ててしまうという危機感から、この集落のたたずまいを守り将来へ残したいという住民の強い思いが今日までの保存活動に繋がっている。

保存活動の大きな柱は、朽ちようとしている建物を保存するという修理事業であり、このための手法として、伝統的建造物群保存地区としての文化財保存の取り組みを平成 10 年から着手し、平成 12 年には町の地区に決定し、平成 16 年には全国初の県の地区選定までこぎ着けた。そして、集落を将来へ守り続けるという住民の思いを実現するためには国の選定を受けることを目標とし、町と住民が一体となってこれまで様々な取り組みを行ってきた。

平成 20 年事業は、事業着手からちょうど 10 年が経過したこの機を捉え、これまでの取り組みをもう一度再認識し、改めてこの集落の持つ魅力や文化財的価値を評価し、今後の取り組みの糧とすることを目的にンポジウムを開催した。

シンポジウム風景

■応募に当たって

この事業がスタートした翌年の平成 11 年度に、町内外への事業啓発を行うため芸術文化振興基金助成を活用した。町にとって初めての事業であり、手探り状態の中でのシンポジウムであったが、文化庁調査官からの制度説明に加え、町、住民、県を巻き込んだ内容であったことから、マスコミ等への反響も大きく、その後の事業が円滑に進むきっかけとなった。事業開始から 10 年の間に国選定という目標に向かって住民と町が一体となって様々な取り組みを行ったことが町観光交流の大きな柱にまでなり、この集落の魅力を尋ねて多くの方が訪れている。しかし、この間には市町村合併などの荒波を受け、ともすれば町の方向を見失うといった紆余曲折もあり、道半ばと言わざるを得ない状況である。

しかし、板井原集落を将来へ保存継承するという目標は失っているわけではなく、この困難な状況を克服し前進させるための折り返し点とするため、この 10 年間の取り組みの経過や成果を改めて認識し今後に繋げるためのシンポジウムを開催することとした。

■助成を受けて

町内において事業趣旨がなかなか理解されにくい状況であったが、一定の認知を得ることができた。この事業を進めるには、町予算を投入することの意義が広く理解されることが必要不可欠なことである。本事業を平成 20 年度に実施できたことで、引き続き財政状況が悪い中、平成 21 年度には町予算として措置できたことは、芸術文化振興基金の助成による効果として大きいものがある。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 11 年度	200 千円	681 千円
平成 20 年度	200 千円	450 千円

連絡先
鳥取県八頭郡智頭町大字智頭 2072-1
智頭町役場企画課　大坪義道
Tel：0858-75-4112　Fax：0858-75-1193
E-mail: ohtsuboy@town.chizu.tottori.jp
HP: http://www1.town.chizu.tottori.jp/dd.aspx

5
文化財編

市指定無形民俗文化財デジタル映像記録事業

富山県射水市

■活動概要

平成 17 年 11 月に五市町村(新湊市・小杉町・大門町・大島町・下村)が射水市として合併した。「射水」の呼称は、奈良時代から使われ始めており、伝統文化が継承されている地域にふさわしい地名となった。

市ではこの合併を契機に指定文化財 140 件の台帳整備を手がけている。とりわけ、所作を伴う 13 件の民俗文化財については、デジタル映像記録化して保存継承のための基礎資料とする取り組みをはじめた。

完成した DVD は学校教育や社会教育の場などで活用し、地域の伝統文化を知り、より身近な行事として親しみを感じ、文化財愛護の精神が芽生えるきっかけづくりを目指している。

平成 21 年度記録予定の「黒河夜高祭」

平成 20 年度作成の映像記録 DVD パッケージ

■応募に当たって

21 年度事業の「黒河夜高祭」については、保存会員の高齢化と減少が進み、会の維持と若返りが課題となっている。行事の存続については、学童数の減少が見られるものの、近年、新興住宅街が黒河地区に加わったことにより危機を脱した感はある。しかし、新旧地区住民の様々な考え方による伝統行事の所作の変容が懸念される。

このため、デジタル映像記録事業を通して、これまで伝承されてきた経過を含め、細部まで記録することにより、行事の意義が深く理解されるとともに安易な改変の防止が図ることができる記録作成を行う。

■助成を受けて

市内 5 地区に伝わる民俗行事のうち、20・21 年度実施の下地区・小杉地区に引き続いて、22・23 年度は新湊地区の海にまつわる民俗文化財「澗建(まだ)てのえびす様渡し」、「新湊めでた」、「ボンボコ祭」、「放生津八幡宮の築山行事」、「新湊曳山まつり」、「海老江曳山祭り」。24 年度は、大門・大島地区の「大門曳山祭り」、「赤井の親子獅子」の映像記録を予定しており、今後につなげていきたい。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 21 年度（予定）	500 千円	1,183 千円

連絡先
輪島市三井町長沢 1-49-3
NPO 法人　輪島土蔵文化研究会　萩野紀一郎
Tel：0768-26-1666　Fax：0768-26-1665
E-mail：kibohagino@aol.com
HP：http://wajimareno.exblog.jp/

6
文化財編

見付天神裸祭の保存伝承活動

見付天神裸祭保存会（静岡県磐田市見付）

■活動概要

東海道の宿駅、古代遠江国府の所在地として栄えた見付を舞台に繰り広げられる矢奈比売神社（見付天神社）の大祭が見付天神裸祭である。腰蓑を着けた裸姿の男達が、矢奈比売神社の拝殿や町中で乱舞することから「はだか祭」と呼ばれ、平成 12 年 12 月に国の重要無形民俗文化財に指定された。見付天神裸祭の一連の行事は、大祭の一週間前から始まる。元天神の“祭事始”、町を清める“御斯葉おろし”、遠州灘海岸で氏子を清める“浜垢離”、神社の境内を清める“御池の清祓い”と続き“大祭”が行われる。平成 21 年の大祭は 9 月 26 日・27 日に行われる。

この祭は幾多の変遷をたどりながら、現在でも伝統を重んじ、磐田見付地区全体をあげて継承されている。しかし、遠州灘海岸で行っていた浜垢離も屋形船からバスに切り替えられ、夜明け前まで行っていた祭が深夜 1 時までに凝縮された。本事業では屋形船による浜垢離を復元し、昭和 30 年代半ばまでの裸祭の内容を古老への聞き取り調査により記録化することを目的としている。

見付天神裸祭の様子

昭和 30 年以前の浜垢離の様子

■応募に当たって

保存会は、重要無形民俗文化財「見付天神裸祭」の伝統ある形式とその格調を受け継ぎ、正しくこれを保存・継承することを目的に組織された。祭の主体者として伝統行事を担うとともに、現在の祭の様子の記録化、後継者の育成、リーフレット等により地区への啓蒙・顕彰を行ってきた。

平成 21 年度事業は「記録の作成」及び「浜垢離屋形船の復元」を計画した。記録の作成では、かつての祭事を経験した古老から聞き取って本来の裸祭の形態を記録した報告書を作成、また、一般参加者や市民に「浜垢離の屋形船」を解説した小冊子を作成・提供し、伝統ある裸祭への理解を深めたい。浜垢離屋形船の復元は、川船に屋台を乗せ、浜印の幟、天幕、提灯等で飾り付ける代表的な仕立て方を復元し、船上で、浜垢離の際に奏でたお囃子を披露･公開する。

■助成を受けて

祭は見付地区 29 町が組織する祭組や先供と呼ばれる集団が、江戸時代からの伝統を伝えている。昭和 30 年前後に交通事情などから祭が変容し、現在の形となった。かつての様子は映像や文献などの記録が少ないため古老たちから聞くしかなく、時を経るに従って様子を知る古老も限られてきている。このため、聞き取り、記録し、かつての祭を復元することで、正しい継承を図ることができ、地域を挙げて将来につなげる努力をさらに高めていきたい。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 21 年度（予定）	700 千円	1,657 千円

連絡先
静岡県磐田市見付 1114-2
見付天神裸祭保存会
事務局長福代陽一
Tel：0538-32-2349（事務局長宅）

7
文化財編

正八幡神社龍王舞伝承・公開

正八幡神社龍王舞保存会（兵庫県姫路市）

■活動概要

この伝統芸能は、16 世紀以来宮脇地区が正八幡神社に奉納してきた。平成 2 年 11 月姫路市指定重要無形民俗文化財に指定された。「龍王舞」は「じょまいじょ」と読み、舞人と囃子で構成され、舞人は天孫降臨神話の猿田彦命に模された衣装をまとう。

平成 15 年事業は次のとおり古老の徹底した指導のもとに龍王舞の正確な芸態を伝承し、公開を通じて保存継承及び地域振興を図った。

□ビデオの作成：古老の徹底指導による芸態を映像として記録し、保存会及び後継者養成に活用。

□記録写真の作成：古老の徹底指導による芸態及び準備から公開当日の行事までを写真で記録。

□公開：正確な芸態で披露。由来・特色・芸態を説明するパンフレットを配布し、理解を促進。

龍王舞

舞人と囃子

■応募に当たって

時を経るにつれて芸態が少しずつ変化していることに危機を感じ、現存している芸態を映像記録に残すための事業資金について市教育委員会に相談したところ、芸術文化振興基金を紹介された。民俗文化財としての公開だけでなく、記録作成（映像・写真等の記録）も対象とし、公開活動と記録による伝承という二つの柱で活動を計画した。なお、要望書類などは市の指導を受けながら作成した。

■助成を受けて

芸術文化振興基金の助成対象活動として採択されたことを契機として、地区住民の関心が高まり、老若男女を問わず地域のコミュニケーションが活性化した。衰退していた保存会の活動も活発化し、学生をはじめ多くの若者や高齢者が積極的に参加するようになることで地域の活性化につながった。また、映像記録は、編集ののち広く市民に紹介することができた。

その後、保存会は、衣装や鳥兜等を新調・修理するなど独自に活動し、現在も発展を続けることができている。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 15 年度	300 千円	1,145 千円

連絡先
姫路市船津町 3002-2
正八幡神社龍王舞保存会
会長　東郷満弘
Tel/Fax：0792-32-4313

8
文化財編

拝宮農村舞台公演（はいぎゅう）

拝宮谷農村舞台保存会（徳島県那賀町拝宮）

■活動概要

徳島県は全国一人形浄瑠璃が盛んであると言っても過言ではない。多数の人形座や大夫部屋があり、人形師は全国からの注文に応えている。さらに県内各地の神社境内には人形芝居用の農村舞台が全国で最も多く残っている。

谷川のせせらぎと樹齢数百年の鎮守の森に囲まれ、江戸時代の山里の風情をそのままに残している拝宮農村舞台（那賀町指定有形民俗文化財）もその一つである。また、かつては人形数十体を有した拝宮人形座もあった。農村舞台の人形芝居は、五穀豊穣や家内安全を願って奉納するために演じられ、まさに芸能の原点とも言えるものであるが、昭和 22～23 年頃を最後に人形浄瑠璃公演は行われていなかった。

伝統芸能を後世に伝え、住民の連帯感を育み、地域の活性化を図ることを視野に入れ、平成 16 年に拝宮農村舞台の人形浄瑠璃公演を復活させて以来、毎年 5 月の最終日曜日に公演を継続しており、多くの人々が訪れている。

拝宮谷農村舞台保存会による「えびす舞」

拝宮谷農村舞台全景

■応募に当たって

農村舞台は交通の便が悪く、雨や風、暑さ寒さなど天候の影響も受けやすい。しかし、神社の境内という独自のロケーションや雰囲気を活用しながら、地元ならではの魅力を引き出すことにより、街中の劇場では決して味わうことのできない風情を楽しんでもらうことが可能である。そこで地元に伝わる「えびす舞」や県内の人形座の出演に加えて、プロの人形座や人形浄瑠璃以外のジャンルの芸術家を招へいし、舞台の魅力を活かした演出の公演を実施してきた。また、人形浄瑠璃の古典作品との対比を楽しむために新作浄瑠璃の上演、県外の人形座を招いて公演の幅を拡げるなどの工夫も行った。

■助成を受けて

前述のように、阿波人形浄瑠璃の伝統的な公演だけでなく新たな試みにも取り組み、地域内外から多数の観客を迎えることができた。一連の活動を通じて、人形芝居用の農村舞台という伝統的な場所の保存活用や、阿波人形浄瑠璃の新たな可能性を探ることができた。

また、便利さや快適性、効率性を求めがちな現代の生活にあって、不便な場所へ時間をかけて出かけていき、人形浄瑠璃というスローな芸能を、ゆったりとした時間の流れの中で楽しむ、というこの事業を通じて、新たな価値観を提案できるのではないかとも考えている。

今後は、「えびす舞」にさらに磨きをかけるとともに、人形芝居の背景として使われてきた「襖からくり」の復元など、より多くの住民が楽しみながら参加できる事業に取り組んでいきたい。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 19 年度	300 千円	1,015 千円
平成 20 年度	500 千円	1,180 千円
平成 21 年度（予定）	400 千円	1,000 千円

連絡先
徳島市上吉野町 3-22-2
拝宮谷農村舞台保存会　佐藤憲治
Tel/Fax：088-655-6457
E-mail：satou-kenji-1@mf.pikara.ne.jp

9
文化財編

伝統構法による建築の修理技術の研修

特定非営利活動法人　伝統木構造の会（新潟県柏崎市）

■活動概要

日本の伝統木構造を育んできた環境は、時代の変遷、木造に対する意識の変化などにより、継承者問題も含め危機的な状況になりつつある。特に、地震により傾いただけで年代を経た伝統木構造は危険という印象があり、建築基準法改正によって伝統木造建築の実践に困難性を伴うものもある。近年、擬伝統木造風意匠や木の質感そのものは広く受け入れられているが、表面的な流行では伝統木構造を生み出してきた職人や幾世代もかけて育てる山林を守ることはできない。

本事業は、伝統木構造を正しく評価し、特に構造上の安全性の解明及び柱、梁などを組み合わせる技術の確立が急務であることから、構造金物、合板、接着剤に頼らずに伝統技術の中にある叡智を最大限に活かした伝統木構造の普及に努め、次世代への継承を目指している。

白山神社（入母屋造り）

諏訪神社（切妻造り）

■応募に当たって

伝統木構造技術がもっぱら神社仏閣や文化財、茶室など限られた分野にしか使われず、現代の人々にとって過去のものか非日常的な存在になろうとしている現実に対して危機感を抱くようになり、実生活に結びつかなければ将来の活路は厳しくなると想定された。地震被災地の仮設住居を間伐材利用で伝統技術を駆使して造れないか、損傷を受けた木造建造物の修理に伝統技術を活かせないかと現地で情報収集するとともに会員から義捐金を募った。

新潟の会員から中越沖地震で傾いたまま取り残されている村社が柏崎市五日市に存在していることを知らされ、早速地元と話合いの上、実際の建物を教材に技術を習得する研修を開催し、村社の復興に向けて地元と協力することを確認して、事業を実施することとした。

■助成を受けて

平成 19 年度は「伝統木構造の構造設計研修」を目的とした講習会を東京・東海・鳥取の 3 カ所で催し、主に講師派遣費用に充当することにより参加者の負担を軽減できた。平成 21 年度は実際の地震経験のない設計者、大工にとって貴重な体験となる現地実地講習会を企画したことから、講師の現地活動交通費などへの充当が可能となり参加者の負担が大きくなる懸念を回避できる。

各地で地震が起こる度に、損傷した木造建造物が修理されずに建替えられてしまうことは、伝統木構造修理技術が普及しておらず、被災地に技術者が不足していることが挙げられることから、今後、平成 21 年度の実績をもとに、伝統木構造技術の確立と普及に向けた活動を展開していきたい。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 19 年度	900 千円	2,971 千円
平成 21 年度（予定）	1,700 千円	2,000 千円

連絡先
輪島市三井町長沢 1-49-3
NPO 法人輪島土蔵文化研究会　萩野紀一郎
Tel：0768-26-1666　Fax：0768-26-1665
E-mail：kibohagino@aol.com
HP：http://wajimareno.exblog.jp/

10
文化財編

珠洲古窯復元焼成実験

珠洲古窯研究会（石川県珠洲市）

■活動概要

12～15 世紀（平安末～室町時代）に生産された珠洲焼の窯を復元して焼成実験を行う。失われた中世窯業の技術の解明を目的として、耐火レンガなど現代の資材を使わず、発掘資料や炭窯、瓦窯などの伝承技術を参考にして、煙突をもたない当時の窯形式を実物大で復元した。平成 20 年度は、2 度の焼成を行い、その実験成果をもとに、平成 21 年度は、窯の再構築と焼成品や焼成法を改良して、より忠実な復元実験を目指す。実験の進捗結果をもとに、一般参加型の珠洲焼制作体験のイベント開催を秋に予定している。

築窯作業中の会員（平成 20 年 5 月）

第 1 回焼成実験（平成 20 年 9 月）

■応募に当たって

研究会には陶芸家は 1 名のみで、他者は様々な職業人によって構成されている。そのため、十分な陶芸経験はもとより、資材や資金の裏付けもないまま、会員の熱意とアイディアで、なんとか継続してきた。しかし、そのために妥協した点も多々あり、より良い実験を行うには、どうしても資金が必要となる。

大甕の成形や、粘土採掘など会員の手に余る部分が解消されることを期待し、予算の使用時期や支払い方法も考えながら、事業スケジュールを組んでいる。

■助成を受けて

助成によって、平成 21 年度事業が計画どおり進めば、平成 20 年に行われた全国初の試みである復元焼成実験を通して、より厳密で必要十分な実験成果が得られ、初期の目標は達成されると思われる。得られたデータ等の成果を公開することで、珠洲焼に限らず、より広く中世窯業の周知に生かせるものと期待している。

また、実験窯は、実験目的が終了した後も、できるかぎり継続して焼成を行い、一般参加の珠洲焼制作体験、郷土史の学習や体験、さらには珠洲焼のシンボルとしての活用を考えている。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 21 年度（予定）	800 千円	980 千円

連絡先
石川県珠洲市蛸島町 1-2-563
珠洲市立珠洲焼資料館
珠洲市教育委員会事務局文化財担当　大安尚寿
Tel：0768-82-6200　Fax：0768-82-6045
E-mail：bunkazai@city.suzu.ishikawa.jp

11
文化財編

土佐楮生産技術の継承及び後継者養成事業

土佐楮保存会（高知県いの町）

■活動概要

平成 20 年度は、土佐楮の栽培技術を保存・継承するため、次の４つの活動を実施した。平成 21 年度も同様に継続する。

1　楮生産技術の研修：土佐楮の主要な２産地でモデル園を指定し、間引き作業（5～6 月）、芽欠き作業（6～7 月）、中耕作業（5 月、7 月）、施肥作業（6 月、8 月）、下草刈り（5～8 月）を行った。

2　楮の品種分け研修：土佐楮には５種類の品種があり、その見分けが困難な事もあって、区別なく使用されている現状に鑑み、モデル園を１カ所での同一品種栽培を行った。

3 楮加工技術の研修：従事者の高齢化が進み、加工技術による品質の低下が見られる現状に鑑み、優れた生産技術を継承するため、各地域における独特の加工技術の研修を行った。

4 土佐楮の品質調査：県外で使用されている土佐楮の栽培技術、加工技術等について聞き取りなどの調査を行った。

芽欠き作業

間引き作業

■応募に当たって

高知県の中山間部で昔から栽培されてきた土佐楮は、気候風土に恵まれ、豊富で優秀な楮として全国的に知られているが、近年、楮の生産が激減し、品質の低下が顕著に見え始めてきた。世界に誇る和紙その物の危機につながりかねない。この活動に是非とも農家を引き込み、優れた生産技術の継承と後継者の育成を図りたい。本活動の特徴として、生産者、加工従事者だけでなく、原料の品種、良し悪しを吟味してもらうため、長年原料の流通に携わり実際に原料を使う手漉き和紙職人にも加わってもらい、作り手・使い手・流通による交流を進めていくことにより、国産和紙の安定供給による文化財の保存を図りたい。

■助成を受けて

平成 20 年度は、芽欠き作業に関して期待した程の効果は認められなかったが、間引き作業等に関しては従来と比較して品質が非常に良好となることが分かった。しかし、他産地では昔も今も芽欠き作業を行っており、引き続いて芽欠き作業も実施しようと考えている。景気の大幅な悪化等により、過去の例から原料の価格が安いと生産者は栽培を止め、価格が高いと紙漉職人が購入出来できない結果を招きかねず、和紙業界には、外国産に取って代わられるのではないかという大きな不安がある。平成 20 年度事業の結果、活動内容を農家、関係団体に手紙を送ったところ、山奥で細々と楮を作り続けている農家の高齢者から、自分たちの仕事が認められたとの喜びの電話を貰ったことが保存会として大変嬉しく、また、お互いに励まされた。平成 21 年度以降は、時期をみて生産者を訪ねて作り手との絆をより一層深め、作り手・使い手・流通による交流により、納得出来る価格での安定供給による文化財保存のためにも、継続して全国的に原材料生産技術の伝承に努める。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 20 年度	1,000 千円	1,100 千円
平成 21 年度（予定）	1,200 千円	632 千円

連絡先
高知県吾川郡いの町波川 287-4
高知県手すき和紙協同組合内
土佐楮保存会　　上田剛司
Tel：088-892-4170　Fax：088-892-4168
E-mail：　tosawasi@basil.ocn.ne.jp

12
文化財編

原種養蚕から絣紬織物製作技術保存伝承活動

特定非営利活動法人　日本工芸継承協議会（宮崎県綾町）

■活動概要

日本工芸継承協議会では、工芸技術の継承を目的に設立され、特に宮崎県綾町に伝わる手紬染織工房の技術を中心に伝承活動を行っている。

平成 19 年度に地域の滞在型体験ツアーの一環として、1 週間の織物技術研修会を開催した。

平成 21 年度から本格的な後継者養成を目指し、プロの染織人を養成する 2 年間の研修コース「染織マスタークラス」を開講する。

織物図面の書き方の指導

機織りの指導

■応募に当たって

これまでは、短期間の研修会を行ってきたが、期間が短いことから趣味的なものにしかならず、目的とした後継者育成には至らなかった。

一方、もの作りや手仕事が見直されつつある時代の中、芸術系大学や専門学校等で染織を学ぶ若者が少なからずいるにもかかわらず、それを仕事として継続していくことはまだ難しい状況がある。

染織を生業としていける人材を養成することを目的に掲げ、長期間の本格的な後継者育成のためのプログラムを開催することとした。

■助成を受けて

日頃生産している現場でプロの仕事を体験することで技術を学び取ってもらうことを特徴としたプログラムであるが、これは、受け入れる工房にとってかなりの負担となる。工房といっても中小企業であることから経営的に厳しい状態にあるため、助成を活用することで、受け入れ工房の負担を軽減し、学ぶ若者にとっても、工房にとっても、無理なく充実した学びの時間と場所を確保することができる。これにより、養蚕・製糸・藍染・織物技術まで一貫製作できる人材を養成することができる。

■助成実績

助成年度	助成額	総事業費
平成 21 年度（予定）	1,700 千円	2,192 千円

連絡先
宮崎県東諸県郡綾町北俣 4186
綾の手紬染織工房　　岡田心平
Tel:0985-77-0156　Fax:0985-77-2577
E-mail：sinpei@ayasilk.com

http://www.ntj.jac.go.jp/kikin

独立行政法人日本芸術文化振興会　基金部

〒102-8656　東京都千代田区隼町４－１
電話 03-3265-6302（直通）　FAX03-3265-7474

この助成事業事例集は、上記ホームページで公開しています。